

TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー『大学における映像アーカイブ活用と新たな展開』
- 公開セミナー 制作者に聞く! 大河ファンタジー『精霊の守り人』
- 公共施設での番組利用
- 平成29年度第2回番組保存委員会
- 2017 秋の人気番組展
- ACC CM発表会&番組を見る会
- 放送ライブラリー公開番組の紹介

■公開セミナー『大学における映像アーカイブ活用と新たな展開 ～大学と放送ライブラリーによる取組の報告～』

11月18日、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催により、同大を会場に公開セミナー『大学における映像アーカイブ活用と新たな展開～大学と放送ライブラリーによる取組の報告～』を実施した。放送ライブラリーの公開番組を教材として大学の授業に活用するサービスを利用した先生方を招き、事例報告と意見交換を行った。

[登壇者] 荒巻龍也(筑紫女学園大学教授)

伊藤 守(早稲田大学教授)

丹羽美之(東京大学大学院准教授)

柴野京子(上智大学准教授)

[司会] 音 好宏(上智大学教授)

■大学の授業での番組利用例

荒巻教授は、「メディア文化論」「現代社会とメディア」「テレビ論」の授業の中で、NHK開局記念番組や『日本の素顔』『8時だヨ!全員集合』『おしん』等を利用した。「日本人がテレビをどのように受容していったかを、初期のテレビ番組を視聴しながら説明した。放送当時は俗悪番組的な扱いを受けた『裏番組をブツ飛ばせ!!』なども、その影響を考えるとという意味で取り上げた」と報告した。

伊藤教授は、「広報関係論」の授業の中で、「日本のドキュメンタリー史再考」をテーマに、NHKのドキュメンタリーを利用した。「テレビ離れが進む学生に、初期のドキュメンタリーを見せることで、現在とは異なる表現方法を知り、テレビの可能性を考えてほしいと思った」と言う。番組を視聴しながら番組の構図や編集・音声の特徴を解説する授業で、「学生の映像の読み取り能力が向上し、また映像を構造的に考えたり、映像を用いて考えるという訓練にもなった」と報告した。

丹羽准教授は、「マスメディア論」の授業の中で、「テレビ番組で見る戦後日本」をテーマにクイズ番組や特撮番組を利用した。「テレビと戦後日本を同時に学ぼうという授業。テレビの総体を見せたいと思ったので、バラエティーやドラマなど何でも使った」という。「憧れのアメリカ」がテーマの回では、高度経済成長期に入り豊かさを実感していく時代について、正解すると豪華な賞品が当たるクイズ番組を例に解説した。「文字資料ではなく映像を見ることで、学

生は過去の人物にも人間性を感じ、歴史が生き生きと動き出す感覚が得られた」と報告した。

柴野准教授は、「デジタルアーカイブ論」の授業の中で、放送番組センターが1970年代に制作した教養番組を利用し、番組情報のメタ・データ作りの実習を行った。学生たちは台本を元に、映像を見ながら登場する人物や施設名、使用されている著作物等をチェックした後、静止画を抽出したり番組概要を書くなどの作業を行った。「データ作成のために細かく集中して番組を見ることで各シーンの意味を知り、番組制作に多くの人と権利が関わることや、それらを残すことの意義を理解した学生が多かった。作成したデータは実際に放送ライブラリーで公開されるということで、緊張感や責任感を持って作業に当たれた」と報告した。

■他のアーカイブ活用事例

丹羽准教授は、現在『NNNDドキュメント』に関連する研究プロジェクトに携わっている。「日本テレビ系列29局が制作し、47年約2,300本の歴史があるこのドキュメンタリーは、戦後史を学ぶ教材として価値があると考えた。同時に放送局側には、各制作局が管理してきた番組データを総覧できる場がなく、また制作者の交代で番組の記憶が継承しづらくなっているという現実があった。放送局と大学が共同でアーカイブ活用に取り組むのは非常に稀なことだが、今回は大学がデータベース作成を手伝う代わりに、番組データを研究にも利用させてもらうという、お互いのメリットが合致した事例」と語った。音教授は「国内外の制作者が集う東京ドキュメンタリーフェスティバル(TOKYO Docs)では、日本の参加者に世界の優れたドキュメンタリー百選を紹介している。アーカイブに対する認識が日本は弱いのが、今アーカイブを強化し、グローバル化に対応しておかないと、日本だけが番組制作におけるガラパゴスになってしまうという危機感がある」と話した。伊藤教授は「アメリカでは大学間で連携し番組アーカイブを共同で利用するシステムがあるが、日本にも同じシステムが必要。制度や組織、費用面など協議すべき点は多いが、大学教育における映像利用という点だけでなく、海外への発信も含めて今後重要なことになる」と語った。

■大学における番組利用サービスに対する意見、要望

今回先生方が利用したサービスは、番組を放送ライブラリーから大学の教室にストリーミング送信し、視聴する。学生に事前の番組視聴を指示した荒巻、伊藤教授は「決められた教室など特定の場所でしか見られないのは、今の学生には不便。スマートフォンやタブレットでも視聴できると良い」と要望した。また、許諾が得られず利用できなかった番組もあり、丹羽准教授は「一度利用された番組は、次回以降の権利処理が不要になる仕組みが作れないか」と提案した。また丹羽准教授は「利用できる公開番組数が多いとは言えないのが現状。また、受賞番組だけでなく、いわゆるB級作品も含めて集めていく必要がある」と語った。荒巻教授は「教員としては、事前に番組内容を知りたくても横浜に行かなければ視聴できない。授業で使う前に視聴できる環境や、地方にも視聴できる拠点があると便利」と語り、全国でアクセスできるアーカイブ環境の整備も課題の一つとして挙げた。

■番組アーカイブにおける課題とその意義

今後の番組アーカイブの課題について、伊藤教授は「アーキビストの養成が第一。また、アーカイブされたものをどう利用するかという目利きができる人、いわば“映像のソムリエ”も必要だ」と語り、柴野准教授も「今回の授業がきっかけで、アーキビストの仕事に関心を抱く優秀な学

生が出てくると思う。また授業の中で『台本を見ることができて良かった。台本と番組を照らし合わせていく中で、学んだものが多かった』という感想が多かったので、番組と台本をユニットで考えても良いのでは」と話した。音教授は「アーキビストという、次世代に歴史を残すための作業ができる人材を、どうやって高等教育機関で育てていくかという課題は、アーカイブスの議論とセットで行っていくべき」と語った。

番組アーカイブの意義について、柴野准教授は「番組アーカイブは、メディア研究者だけが使うものではない。国文学や歴史学に使ってもいい。番組はもっと色々な形で使えるということ、私たちメディア研究者も大学内でアピールしていく必要がある」と語り、丹羽准教授は、「NHKアーカイブスには、研究者が利用できる学術利用トライアルという仕組みがあり多くの研究者が利用しているが、そうすると日本のテレビ史がNHKの資料だけで論じられることになり、民放の番組は研究や批評の分野で無かったことにされてしまう。アーカイブスの整備は、研究者だけではなく、制作者、放送局、視聴者すべてにとって意味のあること。放送文化全体を発展させていくには、番組を制作し、視聴し、批評や研究を行い、再び制作現場にフィードバックされるという循環が必要で、長期的に見れば放送文化の発展につながっていく」と語った。

■公開セミナー 制作者に聞く!

11月23日、公開セミナー「制作者に聞く!」を開催。今回は、壮大なファンタジードラマの世界を映像化して話題となった、大河ファンタジー『精霊の守り人』(NHK)を取り上げた。この作品は、上橋菜穂子氏によるファンタジー超大作をドラマ化し、3シーズンに分けて制作され、「シーズン2 悲しき破壊神」は、優れたテレビ美術に与えられる「伊藤熹朔賞」の本賞を受賞したほか、東京ドラマアウォード2017特別賞も受賞した。

[登壇者] 加藤 拓 (制作、演出/シーズン2)

山口類児 (映像デザイン)

前田貢作 (テクニカル・ディレクター/シーズン2、3)

柘植伊佐夫 (人物デザイン監修)

[司会] バリー 荻野 (コラムニスト)

セミナー前半、「シーズン2」第7話「神の守り人」を上映。シーズン2は、ロタ王国、タルシュ帝国、新ヨゴ国、この3つの国を中心に物語が展開し、それぞれの国の風土や文化などの違いも見所の一つである。第7話は、ロタ王国の「建国の儀」のロタ祭儀場での物語が中心で、シーズン2のメインとも言える迫力ある映像が繰り広げられる。

壮大なファンタジードラマへの挑戦について、加藤氏は「NHK放送90年記念作品として、新機軸のドラマ、世界で見られるようなドラマを作るために、時代背景など日

大河ファンタジー『精霊の守り人』

本の知識がなくてもわかる、物語性の強い、連続で楽しめる作品を3年間かけて作るという試みだった」と番組立ち上げのいきさつについて述べた。『精霊の守り人』は、随所にVFX、CGほか、新しい映像技術が使われている。テクニカル・ディレクターとして、それ

ら映像技術を担当した前田氏は「連続物でファンタジー、尚且つ4K。技術的にかなりハードルの高い取り組みだった。更に、ファンタジーの世界感を作るために、画面が明るく表現



前田 貢作

できるHDR (ハイダイナミックレンジ) にもチャレンジした」と語った。映像デザインを担当した山口氏は、「ビジュアルのきっかけを掴むために、最初はもがき苦しんだ。原作を読み返し、アジアが

全体を貫く世界観のベースになっていると感じ、“見たこともないアジア”を作ろうと決めた。皆で、そのキーワードを共有できた所から始まった」と振り返った。

柘植氏は、大河ドラマ『龍馬伝』から人物デザイン監修として参加している。人物デザイン監修は、ドラマに出て



加藤 拓

くる役者たちの衣装、メイク、かつら、人間周りの小道具など、全てのデザインを総合的に担当する。加藤氏が「大河ドラマなどは分業システムが確立していて各パートに対する知識が共有されているが、こういうファンタジーには一人のクリエイターの牽引が必要で、それによって何段階



柘植 伊佐夫

も上に行ける」と説明を加えた。柘植氏が異世界のファンタジーという今回の作品について、「美術同様、その世界の風土、文化的な背景があり、その背景ゆえの建築物が出来、それではその中にはどのような人々が居るか考える。その土台がなく、見たことがないものを作っても全くの嘘になってしまう。その按配を探るのに皆で苦労した」と振り返ると、加藤氏が「お互いのイメージを共有するために合宿も2回行った」と続けた。

山口氏が、世界感を構築するために使用した実際の土地や風景の写真などの資料をスクリーンで紹介。それらの資料を見ながら「ツーラムの市場はこういう感じ」「こういう素朴な港の雰囲気はどうしたらスタジオで作れるか」など話し合ったという。



山口 類児

実際にイメージハンティングに行った中国の雲南省の村は「ロタの街を作る時にすごく参考になった。アジアの国々の路地に入ると、今、何処にいるかわからないような迷路感がある。その感じをスタジオで出したかった」と山口氏。



そうした試行錯誤から生まれたセットは、実在するアジアの街の一画と思えるリアルなセット(写真)となった。そして、山口氏は「セットと人物デザインはハーモニーが必要。どちらかが浮いてしまうと、ファンタジーの世界が成立しなくなる」と柘植氏の話に繋げた。

柘植氏が、登場人物のデザイン画と実際のドラマの姿を次々と紹介。どの人物も、演出、美術、衣装部、小道具など、チーム全員が集まり衣裳合わせをした。山口氏が「柘植さんの衣裳合わせは独特で、現場で次々合わせていくので、凄く面白い。ここにあった布をちょっとあててみて、びりびりっと破いて、巻いたり…。それが本当に衣裳になっていく様子には驚いた」と話した。海賊のセナの「オロ」という雨具について、柘植氏は「原作に『オロ』と書いてあるが、どんなものかは書かれていない。大きいブリーツのような状態でカッパを作ったらどうかと想像し、油紙で試作を作ってみた。畳まれていた状態では番傘みたいと思

ったが、着てみたらなかなか風情があり、本番用になった」とエピソードを明かした。

こうして世界感が作られていった作品を、更にファンタジーの映像として作り上げるのが前田氏の仕事。前田氏は「この作品は、皆が話したように、世界観が凄くロジックに出来ている。シーズン2では、エネルギーやパワーをどう表現するか苦労した。力が生まれる理由が必ずあるという所から始まるので、今まで体験した技術の作り方とは違った」と振り返り、シーズン2の様々なVFXの映像を紹介した。アスラが力を振るうシーンについて「こういう映像は、芝居だけ撮り、後でCGを合成する作り方が多いが、今回は“共有する”事を軸にしていたので、撮影現場でも、仮に合成をした映像を見せ、現場の人達に、エネルギーが広がっていく様子を説明した。どのような映像になるか分かれると芝居の熱量が変わってくる」と語った。また、アスラのエネルギーは演じる鈴木梨央さんの声の大きさや筋肉の動きと連動している。そのため、鈴木梨央さんのその時の体調までCGにそのまま反映されるという。その他にも、実際のセットに背景の映像を投影して撮影するフロントスクリーンプロジェクションや、原作の「光の川」という言葉を表現するために、レーザー光線も取り入れた。どちらも、演じる俳優は実際に映像になる世界を見ながら演じられる。加藤氏は「今までのVFXは、グリーンバックの前で撮影し、現場は終了。『あとは宜しく』というスタンスだったが、今回は、現場で作れる限界まで作り込んだ」と作品が貫いた姿勢を語った。



この後、日本初公開の海外版トレーラーの映像や翌々日から始まる最終章のCGのプレゼン映像も紹介された。

最後に、原作者の上橋菜穂子氏が登壇。「物語を執筆する時に、説明をし過ぎず、読者が想像する余地を残している。1行の文章から読者に生き生きと世界を想像してもらいたいので。だから、皆さん一人ひとりの頭の中には、それぞれ違うバルサが居る。ドラマにするには、イメージを作り上げなければならないので、とても苦労されたと思う。今回、読者と同じように行間からイメージして作品を作って頂き、これほど幸せな作者はいないと思う」と感想が述べられた。



■公共施設での番組利用

[市川市文学ミュージアム(千葉県)]

12月15日(金)から、放送ライブラリーの公開番組が視聴できる「サテライト・ライブラリー」を開始した。市川市に在住していた脚本家・水木洋子さんが手がけたテレビドラマ2番組25本を、来館者が個別に視聴できる。

この2番組は平成25年度に同館で実施した「水木洋子テレビドラマ上映会」で上映した作品の一部で、来館者がいつでも水木洋子作品を視聴できるようにしたいとの同館からの要望に応えたものである。

【視聴可能番組】

- 「はまなすの花が咲いたら 全24回」
(1981～1982年放送 TBS/テレパック)
- 「ザ・ネットワーク 女が職場を去る日」
(1979年放送 フジテレビ/PDS)

現在は、上記のほか以下の4施設で継続運用中であり、各施設のテーマに合った番組を視聴可能としている。

- ◇諫早市立諫早図書館/脚本家 市川森一作16本
- ◇広島平和記念資料館/平和、原爆関連13本
- ◇長崎原爆資料館/平和、原爆関連8本
- ◇岡山県立図書館/岡山県関連26本

■平成29年度第2回番組保存委員会

11月に番組保存委員会を開催し、以下3件を承認した。

◇平成29年度保存対象番組の選定

平成29年度の保存対象番組として、①テレビ番組1,103本を選定すること ②ラジオ番組は、各賞受賞番組を中心にリストアップ済みの228本に加えて、11月以降に発表される受賞番組約200本を追加して選定することが承認された。

◇全国展開のロードマップ

5月開催の第1回番組保存委員会以降に実施されたサテライト・ライブラリーの運用と、教育機関での番組利活用の進捗状況などが承認された。

◇「過去に遡及して体系的に番組を選定する方法」の導入

保存番組の充実と、「教育における番組の利活用」「サテライト・ライブラリー」を推進する観点から、未収集となっている以下の番組について、一定期間経過後に提供を再要請することや、放送年度が通常の選定期を外れていても、過去にさかのぼって保存対象に選定する仕組みを導入することを、次回の委員会で提案することが承認された。

対象となるのは、以下の番組となる。

- ①主要な賞の受賞番組
- ②放送史の記録として重要な番組
- ③教育利用やサテライト・ライブラリーにおいて公共的な利用ニーズがある番組

■2017 秋の人気番組展

10月14日～11月26日、地上8局・BS7局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催した。各局の新番組や人気番組のポスター、台本、関連グッズ、衣裳、セットデザイン画・模型などを展示した。フジテレビ『コード・ブルー』をはじめとした、ドラマやバラエティ出演者の等身大パネルの展示が多く、撮影を楽しむ姿が見られた。またNHK『精霊の守り人』で使用した衣裳や小道具も特別展示した。来場者からは、「観てみたい番組が新たに見つかった」「等身大パネルと写真を撮れて嬉しかった」等の感想が寄せられた。



■ACC CM発表会&番組を見る会

12月2日、今年の秀作CMを紹介する「2017 57th ACC TOKYO CREATIVITY AWARDS入賞作品発表会」を情文ホールで開催した。今回の発表会では、テレビCMを扱う「フィルム部門Aカテゴリー」の上位入賞作品を中心に、合計97作品を3時間にわたり紹介した。参加者は151人。

12月5日～10日、放送ライブラリーの公開番組をミニシアター形式で鑑賞する「番組を見る会」を実施した。これは、今年度からスタートした新しい企画で、第1回は芸術祭賞を受賞したドラマ4本を選び、情報サロンで上映した。作品は「山田太一ドラマスペシャル 時は立ちどまらない」(2014年・テレビ朝日)、「スペシャルドラマ ミエルヒ」(2009年・北海道テレビ放送)、「東芝日曜劇場 マンモスタワー」(1958年・TBSテレビ)、「どたんば」(1956年・NHK)。参加者は58人。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーではテレビ番組16,115本、ラジオ番組4,312本、テレビ・ラジオCMを10,796本、劇場用ニュース映画2,683項目を施設内で無料公開している。29年度9～11月に追加公開した主な番組は以下のとおり。

【テレビ番組】

- ◇『縛られた鉄路 ―JR北海道を覆う闇―』2014年5月26日放送・北海道放送
- ◇『土曜ドラマ フルスイング』[1][6・終]2008年1月19日、2月23日放送・NHK
- ◇『ザ・ドキュメント 芸の魂』2014年11月23日放送・関西テレビ放送

【ラジオ番組】

- ◇『KBC長浜横丁 居酒屋清子』2016年6月6日放送・九州朝日放送